

臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報
平成25年(2013)新春号



東京駅丸の内駅舎 1914年完成した東京駅は、1945年に空襲でドーム屋根や内装などを消失。2007年、駅の機能を維持しつつ、丸の内駅舎保存・復原工事着工。2012年10月1日工事完了しグランドオープンした。67年ぶりに南北のドームが甦り、内装も復原された。

「参加しようかな」と思う同窓会にしよう！

—「六然」のころ—

東京同窓会会長 金子鶴男（高5回）



新玉の年の初めのお寿^{ことぶき} お祝い申し上げます。皆様のご多幸とご健勝をお祈りいたしますとともに、本年もよろしくお祈り申し上げます。

今年の干支巳年は奮起と発展の象徴であります。

同窓会は昨年松高創立100周年記念として、これまでの歩みを振り返るとともに輝かしい歴史と伝統を継承し、更なる発展と飛躍を心から願っています。

さて、東京同窓会役員メンバーが替わりました。新しい同窓会へチャレンジ精神で英知を出し合い、過去の慣例や既成概念にとらわれない新しい同窓会を皆さんと一緒に進展するよう頑張りたいと存じます。

◎各種のイベント企画・立案

*当会主宰の講演会

*卒業生へ就活・進学情報支援

*他校同窓会と交流

*会員同志芸文・スポーツ等共通趣味結成

*エトセトラ・・

これらグループ結成を支援し会員相互の親交を益々深めるよう、ホームページや会報で伝えたいと存じます。これを機会に同窓会を理解し総会参加を期待いたします。

さて、松高初代校長林栄太郎先生が「六然の教え」を講演されたことを、今でも強く印象に残っています。中国の崔後渠（さいこうきょ）の言葉だそうです。

○【自所超然・じしょちょうぜん】・自分自身に関しては、世俗の物事にとらわれないようにすること。

○【処人藹然・しょじんあいぜん】・人に会うときは、相手を楽しませ心地よくさせること。

○【有事残然・ゆうじざんぜん】・何か事があるときは、ぐずぐずしないできびきびとやること。

○【無事澄然・ぶじちょうぜん】・何も事がないときは、水のように澄んだ気であること。

○【得意澹然・とくいたんぜん】・得意なときほど、静かで安らかな気持ちであること。

○【失意泰然・しつたいぜん】・失意のときこそ、泰然自若としていること。

この「六然」を心に刻む努力をし、同窓会活動に奨励していききたいと存じます。

最後に、これから会員皆様のグループ積極的参加いただくことで同窓会の活性化が図られ、そして、皆様のご健勝と今後の一層のご協力をお願い申し上げます。

『松高・元年』

地域に理解と信頼され魅力ある 高校づくり！

新しい役職別役員（平成24年6月24日）

役職名	氏 名		
顧問	佐伯 益一（中27）		
会長	金子 鶴男（高5）		
副会長	連絡調整担当	総務・財政担当	広報担当
	向山 律子（高5）	山崎 輝雄（高8）	大橋 貞夫（高10）
会計監事	片柳 ムツ（高8）	高岡 五百子（高12）	
事務局長・次長	吉井 清（高8）	斉藤 正義（高18）	
委員会 委員長	総務委員長	財務委員長	広報委員長
	佐藤 赴（高11）	徳永 道子（高12）	石黒 勝夫（高14）

各委員会・事務局体制（平成24年6月24日）

委員会	委員長	副委員長	委 員
総務委員会	佐藤	石黒（四）	熊倉、山田、郡司、服部、宮崎、三宅、平山
財務委員会	徳永	今井	波多野、松澤
広報委員会	石黒（勝）	滝沢	木村、高岡、森田、塚野、野平、安中、石井、阿部
事務局	吉井	斉藤	林

よろしくお願いします

第55回定期大会において選任された新役員の皆さんから
就任のご挨拶をいただきました。紙上をお借りしてご紹介します。

副会長（総務・財政担当） 山崎 輝雄（高8回）

この度、副会長を仰せつかりました山崎です。

同窓会のことを知りましたのは先輩の方に誘われ参加したのが最初でありました。周りを見ても先輩方ばかりでした。その後、同期生の皆さんも多数出席される様になり、家族のこと、又年齢のせいかわ病気の話して盛り上っております。

昨年は母校の創立百周年の式典に参加いたしました、生徒達も大変礼儀正しく元気で明るく「誇りを胸に」のスローガンのもと盛大に挙行されましたこと、心より喜んでおります。東京同窓会も年々高齢化が進み会員数も減少化に有ります。母校村松高校も又しかりで有ります。同郷、同窓の絆のもと母校永遠の発展と東京同窓会の栄を祈念申しあげます。松城健児頑張ろう。

事務局長 吉井 清（高8回）

新年明けましておめでとうございます。昨年6月の第55回大会には会長の交代が有り、金子新会長より事務局長を仰せつかりお引き受け致しました8回卒の吉井清と申します。

母校は100周年祝賀会も終り、東京同窓会は半世紀余の年月を数え、並み居る大先輩諸侯が育んでこられたこの組織の事務局長は、身に余る重責ですが努力する所存ですので皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

私は元よりアバウトではありますが、目的は一つ東京圏の同窓の方々が本同窓会に参加して頂き、年に一度の大会が皆様から心待ちにされるような楽しい会に成ることを願っている者です。何かお気づきの事がありましたらまず事務局に一報をよろしくお願い申し上げます。

Tel・Fax 042-527-6482

Eメール kiyoshi441@kdn.biglobe.ne.jp

総務委員長 佐藤 赳（高11回）

最近、本を読んだというより、余り目を通すことなく過ごしているが、見た本に頭に残った文章で「物体Aが物体Bに力を加えると、必ずBもAに同じ大きさで反対向の力を返す」と言う。作用と反作用の法則かと。

まあこれには関係なく、松高東京同窓会も50数年になり、同郷としての和、又同窓生としての和、それぞれ横のつながり、先輩後輩の関係でも、堅苦しく考えず明るく楽しく運営されている会です。

年1回の顔見せ会とでも思っ顔を見せて下さい。総務委員会として精一杯やっております。これからもよろしくお願いします。

副会長（広報担当） 大橋 貞夫（高10回）

ある会合に於いて、五泉市長から思いがけない言葉を聞いた。故郷五泉市の幸福度は、全国レベルでも相当な上位（何位？失念）にあるのだという。

人は、身の回りにある幸せをどのくらい気付くことが出来るか？親子・兄弟・友人、地域社会や自然環境など数え上げれば切りが無い。きれいな空気や水のありがたさ、親子夫婦間の思いやり、いずれも普段はありがたさを特別に感じてはいないと思う。人それぞれが持っているアンテナの種類や感度の度合いにもよるが・・・。

折角、故郷の幸福度が高レベルとなれば、故郷を一にする東京同窓会が、少なくとも同レベルにはなれる筈である。否！それ以上を志して行きたい。

今年度も、会員及びご家族皆様方のご健勝と益々のご発展を心底より祈念申し上げます。

財務委員長 徳永 道子（高12回）

この度、財務委員長を仰せつかり、責任の重さを痛感致しております。近年、東京同窓会の財政は厳しい限りですが、歳出はできるだけ抑え、会員の皆様からは、きちんと会費を納入していただき、健全な同窓会運営ができますように頑張ろうと思っております。

年に一度の総会には、同窓、同期の方々が集い、青春のひと時、同じ時間、同じ空間を共に過ごした者同士、心から楽しみながら自由な会にしていけたらと心より思っております。これからも財務委員会へのご協力の程よろしくお願い申し上げます。

広報委員長 石黒 勝夫（高14回）

会報誌の発行を担当します。よろしくお願いします。

会報誌は、平成25年度からは当面の間年1回の発行（1月）となりますが、会報誌では、同窓会や母校の動向をお知らせするとともに、会員の皆さんの近況・活動をご報告、ご案内するなどして、生甲斐や喜び、楽しみを見い出したり、相互に啓発し合える場になるよう、発行が待ち遠しくなる会報誌に努めます。

個人、団体を問いません。奮ってご投稿ください。

〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北6-32-19

Tel・Fax 03-3330-4564

Eメール isgrkto-214@mail.goo.ne.jp

なお、投稿の要領は、16頁をご覧ください。

（お詫び）副会長（連絡調整担当）に就任された向山 律子氏（高5回）から「皆様にお世話になりますが、よろしくお願いします。」旨のメッセージをいただいています。

村松高校東京同窓会・第55回大会報告

広報委員会 石黒勝夫（高14回）

村松高校東京同窓会第55回定期大会は、6月24日正午から、九段下のホテル グランドパレスにおいて総勢約100名が集って開催された。来賓として母校からは鈴木重行校長、同窓会本部からは相田豊会長、浅田光雄副会長、事務局3名、特別来賓として伊藤勝美五泉市長を迎え、滝沢義則・阿部モヨ子両幹事の司会で進行。

第一部総会は、大橋貞夫大会実行委員長の開会の言葉で幕を開け、鈴木多喜男会長の謝辞と挨拶の後、相田同窓会長、鈴木校長、伊藤市長から、ホットな情報や課題を含めたご挨拶と同窓会からの支援のお願いがあった。

来賓挨拶の後、総務・財務・広報の各委員長からの1年間の活動報告を承認。

続いて、2年ほど前の「就活バス」が縁で同窓生が首都圏で経営する企業等に就職した後輩新人5名が紹介され、出席者から歓迎の大きな拍手と激励がなされた。

最後に、役員改選が行われ、新会長に金子副会長ほか、新しい副会長、各委員長を選出して第一部を終了。

第二部は、斉藤たまみさんの民謡と広原武美さんの津軽三味線のコラボレーションをしばし堪能。

第三部の懇親会は、佐伯益一顧問の乾杯の音頭でスタート。ふるさとの地酒もふるまわれて談笑の輪が広がり、恒例のお楽しみ抽選会で最高潮に。

最後に校歌・応援歌を合唱。篠川恒夫幹事の手締め、渡辺八郎副会長の閉会宣言で、来年の再会を誓い散会。

東京同窓会・第55回大会収支報告書

—平成24年6月24日（日）：ホテル グランドパレス—

収入の部（単位：円）		支出の部（単位：円）	
① 平成24年分会費 75名（×8,000）	600,000	① 大会懇親会費（お土産代含む）	638,620
② 寄付金（五泉市長）	10,000	② 会議費（会館使用料）	20,760
③ 同窓会本部（活動費助成金）	50,000	③ 通信費（送信、宅配、切手）	42,100
		④ 消耗品費（コピー、ラベル他）	9,030
		⑤ 本部総会対応費	139,690
		謝礼、花束	70,450
		二次会来賓7名分	28,000
		交通費、その他	41,240
収入合計	660,000	支出合計	850,200
（一般会計から補填）	190,200		
総 計	850,200	総 計	850,200



司会の滝沢・阿部両幹事



紹介された後輩新人5名 ©新潟日報社提供



挨拶する金子新会長



民謡と津軽三味線のコラボレーション



佐伯さんの乾杯音頭



校歌・応援歌の合唱

第55回 東京同窓会出席者名簿

平成24年6月24日(日)

於 ホテル グランドパレス 3F「白樺」

新潟県立村松高等学校東京同窓会

来賓・他 (14名)	旧中学校 (1名)	07 加藤 喜七	12 新井 三郎	19 五十嵐 勝栄
村松高校同窓会	27 佐伯 益一	07 深見 洋子	12 安部 實	19 石黒 久七
会長		07 宮川 裕皓	12 近藤 洋輝	19 塚野 ミイ子
相田 豊 様 (高9)			12 高岡 五百子	19 野平 茂子
副会長	高校 (73名)		12 徳永 道子	19 樋口 順作
浅田 光雄 様 (高20)	02 杵渕 政海	08 岡部 ユキ	12 中村 雅臣	19 武藤 達家
	02 篠川 恒夫	08 片柳 ムツ		
村松高等学校校長		08 木村 孝子		
鈴木 重行 様	03 小池 生夫	08 久我 マキ	13 金子 健二	20 三宅 紀子
	03 瀬倉 武志	08 小出 博三	13 武藤 正昭	20 田中 豊
五泉市長	03 渡辺 八郎	08 鈴木 輝雄		20 宮崎 信次
伊藤 勝美 様		08 高地 彰		20 山本 悦子
	04 梶屋 庄佑	08 塚田 勝		
村松高等学校事務局	04 加藤 清治	08 山崎 輝雄	14 石黒 勝夫	
熊倉 洋子 様	04 坂上 卓夫	08 山西 愈佐子	14 猪口 成吾	
酒井 加代子 様	04 下野 文幹	08 吉井 清	14 斉藤 正克	22 阿部 モヨ子
熊倉 富美子 様	04 鈴木 健司			22 笠原 和夫
	04 鈴木 多喜男			22 斉藤 公明
招待者		09 石黒 四郎		22 滝沢 義則
熊倉 凌 (高62)	05 金子 鶴男		15 高岡 光夫	22 平山 誠一
齋藤 法貴 (高62)	05 雲村 俊健	10 大橋 貞夫		22 山田 俊治
渡部 美由 (高62)	05 佐藤 良平	10 小島 典子	16 服部 修治	
今井 梨香子 (高64)	05 高濱 つる子	10 小日山 芳栄		
山田 唯 (高64)	05 向山 律子	10 新保 優		
	05 山崎 豊吉		18 岩野ハナエ	
出演者			18 笠原 静夫	
民謡 斉藤 たまみ 様			18 斉藤 正義	
津軽三味線	06 畔田 昭義	11 佐藤 赳	18 佐々木 秀和	
廣原 武美 様			18 三室 茂和	
				25 林 信子
津川高校 (1名)				
樋口 雄一 様				
出席者計—89名				

平成25年度 松高東京同窓会開催のお知らせ

◆日時 25年6月1日(土)

午前11時半開会

◆場所 ホテル グランドパレス

千代田区飯田橋 1-1-1

Tel : 03-3264-1111

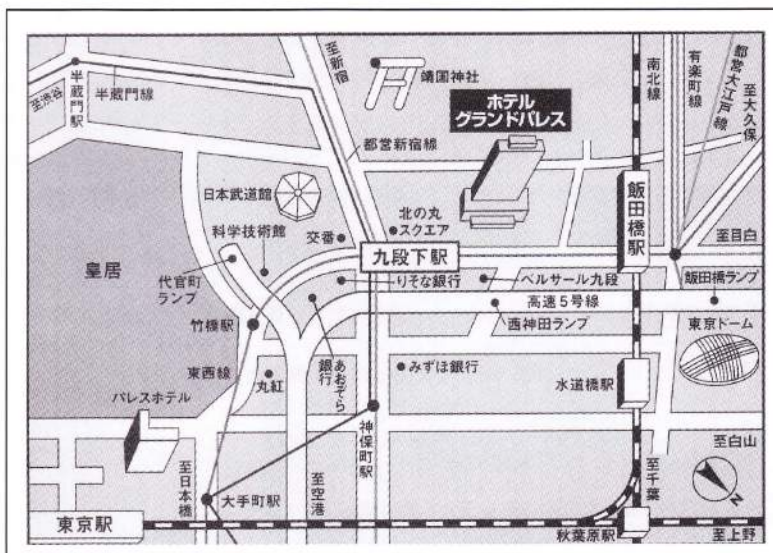
交通 ●地下鉄「九段下駅」

*東西線7番出口より徒歩1分

*半蔵門線・都営新宿線

3a出口より徒歩3分

●JR・地下鉄「飯田橋駅」より
徒歩7分



新潟県教育の範となる大先輩

村松高等学校 校長 鈴木 重行



新年あけましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、お元気に新しい年をお迎えのことと存じます。日ごろより村松高校の教育活動に多大なご理解とご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。おかげさまで一昨年は、創立100周年記念式典を厳粛なる雰囲気の中で、立派にやり遂げ、新世紀松高として、新たな試みと誇りを持って歩み始めたばかりであります。諸先輩方の更なるご協力を心よりお願い申し上げます。

今年度の村松高校の様子を報告させていただきます。

まず、夏の選抜高校野球新潟地区予選会では、部員不足で単独校での出場が危ぶまれた野球部が、数十人の部員数を誇る、シードの強豪校を撃破し、新潟県下を賑わしてくれました。石塚監督の采配が光りました。また、生徒の努力もさることながら、先生方の熱心な指導もあり就職状況も順調で、今年も就職率100%を達成できそうであります。創立100周年の記念事業で設置して頂きました、教室のクーラにより、7、8、9月の3ヶ月間を快適な教室で授業を行うことができました。快適な教室で、国公立大学進学を目指している生徒への進学補習も夏休み中、実施させて頂きました。この進学補習に参加している生徒には、学習へのモチベーションを上げさせようと、進学実績では新潟県下ナンバーワンを誇る、新潟高校へ出かけて行き、新潟高校生と一緒に進学補習を受講させました。さらに新潟高校の草間校長先生から講話まで頂きました。

また、地域との連携を重視し、村松の「のぼり旗祭」の武者行列に生徒が参加したり、五泉市の「食育だより」に漫画研究部員の4コマ漫画が掲載されるなど、松高生の活動が今年も新潟日報や五泉市民新聞に何回も掲載されました。

生徒ばかりでなく、先生方も活躍しております。昨年度始めた村松地区の中学校へ本校教員が出かけての出前授業は中学校から大変好評で、今年度も対象を五泉市内の全中学校に拡げて実施しました。また、10月には、本校の国語科の小林真砂子先生が、新潟県優秀教員に選ばれました。長年にわたる新潟県学校教育への貢献が認められた賞であり、高校教員では年に10名程度しか受賞できない賞です。この他、先生方のきめ細かい指導によって、中途退学者数や不登校生徒数が激減いたしました。

さて、例年、松高では12月に修学旅行を実施していますが、修学旅行へ出かける2年生に対し、次の様な心温まるエピソードを披露いたしました。これは、旧中27回生の佐伯益一様から資料を頂いたものです。この記

事のような立派な先輩を持つ松高生として、誇りを胸に、新潟県のため、日本のため、そして世界のために活躍してほしいという願いを込めて生徒に話をいたしました。

新潟日報「昭和29年5月13日」に載った記事です。内容は、静岡県立掛川東高校の教諭より新潟県教育委員会への手紙であります。

【「関西修学旅行中に同宿した、新潟県の村松高校、十日町高校の両校修学旅行隊の生徒の立派な見上げた態度に感激した。新潟県高校教育の充実ぶりがうかがえる。」というものです。手紙の内容は概ね次の様なものでした。「我々、静岡県立掛川東高校修学旅行隊は女子80名引率者3名で、途中、大阪や琴平で宿泊しましたが、宿泊予定の旅館では、先着の某高校修学旅行隊の男子生徒同士の暴力事件等で宿泊先を変更せざるを得なかったり、高松への汽船の中では某高校男子生徒が飲酒、喫煙を公然と行っていたり。女子生徒を引率する者として、京都で男子生徒と同宿することになっているので頭を悩まして参ったのです。ところが、京都で御県の村松、十日町両校と同宿致しましたが、両校とも実に規律正しく、全く見上げた態度で旅館の女中さんも口を極めて褒めている程でした。私共が後から到着、部屋の変更を申し出た処、既に入室していたにも拘らず快く当方の申し出を承知してくれました。よくある「旅の恥はかきすて」等の様子は微塵もなく、全く上品な態度で、ほんとうに心から高校生らしく旅行を楽しんでいる様子に、私共の引率している女子生徒も遥かに及ばぬ態度に、実に関心致しました。外出するときには部屋の電気を消して、電気を無駄に使わぬようにする所まで気を配っている等は、ややもすれば私共教師も気のつかぬ事です。風呂場に女持ちの時計があったのを届けてくれた時の態度、やり方は只々感心するばかりでした。又、生徒と引率者の間も両校とも実になごやかに見受けられ、これこそ真の高校の修学旅行の態度であると両校の立派な態度に感じ入りました。近頃修学旅行の弊害のみ強く宣伝されております折柄、御県内の二校の立派な態度に感じ入り、そのままにしておくのも惜しく、失礼を顧みずお知らせ申し上げた次第であります。何かのついでに両校に私共の喜びと感謝の気持ちをお伝え下されば、幸甚と存じます。】

松高の大先輩の、この素晴らしい、他人を思いやる心を継承すべく、切磋琢磨させたいと考えております。

皆様方の母校である村松高等学校が輝かしい歴史を刻んでいけるように、今後ともなお一層のご厚情を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

母校・村松高校の主な動き

石黒 勝夫 (高14回)

平成24年度 (7月～3月)

7月

- 第94回全国高校野球選手権新潟大会で、村松高校は3回戦で惜敗するも、最後まで松城精神発揮!

1回戦 村松高校6—2新潟江南高校

2回戦 村松高校8—4新発田南高校

3回戦 村松高校3—4長岡高校

昨年夏に3年生が引退し、部員は5人に。その後助っ人が1人入部。春に1年生が3人加わり、ちょうど9人。そういう状況の中、2回戦ではシードの新発田南高校を破る快進撃をみせた。また、3回戦の長岡高校に対しても、最後まで猛追し大健闘した。

8月

- 新潟高校の進学補習 (3年生) に参加

夏休みも終わりに近づいた8月23日、新潟県下の進学校である新潟高校の進学補習に、村松高校の生徒3名が参加した。

同年代の頑張っている生徒と席を並べての学習体

験と新潟高校の草間校長の講話に、参加した生徒は大いに刺激を受けた。また、生徒全体に、学習意欲が芽生えてきている。

- 始業式・頭髪服装検査 (30日 (木))

9月

- 先輩を招いての「未来を語る」授業

2年生を対象に、働く意義や職業観を早めに身につけてもらうために、今春、社会人として巣立った卒業生を招き、就職戦線を乗り切った体験談や心構えを語ってもらう授業を行った。

- 臥龍祭 (29日 (土))

～永久に残る思い出を～

12月

- 2学年修学旅行 (九州方面) (1日 (土)～4日 (火))

1月

- 始業式・頭髪服装検査 (7日 (月))

3月

- 第65回卒業式 (1日 (金))

本部の平成24年度 同窓会 総会 (8月25日) に参加して

安中 信夫 (高20回)

101周年目を迎えた母校村松高校の本部同窓会総会に、金子会長・向山副会長と共に参加をさせて頂きました。高崎駅で合流し、関越道からしばし高速ドライブを楽しみながら、ふるさと村松へと向かいました。道中、ふるさとの話やら、母校の話、過ぎ去りし日々の思い出を語り合い、楽しい有意義な時間を過ごしているうちに、いつの間にか村松に着いていました。開会時間よりかなり早く着いてしまったので、相談の上、母校村松高校に行き、校舎を散策してみようという事になり、そのままの足で向かいました。

校門のそばに立ちそびえる松城の松は往時と変わらず、歴史のある母校をじっと見守り続けてくれているようでした。門から入った正面には、百周年記念として建立された石碑に、大先輩の書道家、中野松葉先生の筆による「誇りを胸に」の文字が刻まれ、歴史と伝統の上に未来の希望を託す、熱い思いが込められている事を感じました。

さて、いよいよ総会の開催時間となりました。今回の総会での最も大きな出来事は、長年同窓会を支えて下さった相田会長の退任ということでした。毎年、東京同窓会にも遠路お出で頂き、同窓会全体の発展にも多大な貢献を頂きました。後任の荒木新会長は、風格のあられる、母校への思いも熱い方とお見受けしました。新会長を中心に同窓会の益々の発展・永続を心より願うものです。ただ、少子化、生徒減少の波はとどまらず、厳しい現実が校長先生や来賓の方からも語られました。時の流れには逆れません、が、「母校よ永遠なれ」との思いは、共通する卒業生の願いではないでしょうか?応援歌の中にある「我ら八百こにあり」とありますが、現在では「三百」になっているのは寂しい限りです。

懇親会に入り、なつかしき友や大先輩と酒を酌み交わしながら語らいました。同窓生で結成されたバンドの演奏もあり、楽しい一時を過ごす事が出来ました。代表として参加させて頂き有難うございました。



東日本大震災から1年半

被災地仙台より発信

阿部 勇 (高9回)

約1年半前、最大震度7の激震が東北を襲い、巨大津波が街や港をのみ込んでしまった。警察庁のまとめでは9月10日現在、死者は15,870人、行方不明者は2,814人である。被害の大きかった東北3県の状況は、宮城県が死者9,527人、不明者1,394人、岩手県が死者4,671人、不明者1,205人、福島県では死者1,606人、不明者211人となっている。

そして343,000人が、仮設住宅や民間の借り上げ住宅に於いて、未だに避難生活を強いられている。本格的な冬将軍の到来とともに不自由な生活と精神的苦痛は想像に絶するものがある。

しかしながら、全国規模のボランティア支援活動には心から頭の下がる思いである。体力の衰えた高齢者には何とも頼もしい援軍であるが、不自由な生活は持病の悪化や認知症の発症など新たな問題が起きている。津波で親族を失い、原発事故の影響で家族が離散して地域社会も崩壊し、高齢者を支える力が急速に衰えている。

被災地での生活再建に向けた本格的な復興事業は、その緒に就いたばかりである。10月になって、復興予算が真に復興事業に使われていないという実施上の問題が露見し、今後、復興予算の実施を厳重に見守ることになったそうである。1年半もの間、本当に必要な復興事業には2割程度しか使われていなかったそうであるが、日本の政治行政組織は、被災地の復興を真に考えてくれているのだろうか？



宮城県名取市閑上地区で未だに放置されたままの住宅

工場や機械を流失した企業何社かが合符で申請しても予算は得られなかったと聞く。地域の企業が活力を取り戻さなかったら、地域社会は崩壊する。地域の暮らしの礎を築く防災集団移転促進事業は宮城、岩手、福島の被災3県26市町村で約28,000戸を対象に動き始めたが、災害公営住宅の促進は遅々として進まない。

復興庁発表によれば、県外への避難者は未だに3県で

70,900人にも及ぶという。被災自治体は人口減少が進み、地域社会の再生に大変な苦勞をしている。また、震災や津波によって生じた瓦礫の処理は一向に進んでいないが、恐れていた福島第一原発事故の風評被害は広範囲に及び、被災地の再生に大きな影を落としている。



宮城県亘理町の荒れ果てた田んぼ。海岸から4km辺りまで津波が襲い、塩害の為に稲作不能

宮城、福島県内の主な放射線量 (10月2日現在)

原発事故発生前の最大値	
宮城県—0.05	福島県—0.04
宮城県	
栗原 0.08	登米 0.05
大崎 0.06	女川原発 0.08
仙台 0.05	石巻 0.06
七ヶ宿 0.07	名取 0.05
大河原 0.07	岩沼 0.07
白石(越川) 0.16	亘理 0.09
角田 0.12	山元 0.15
福島県	
福島 0.68	伊達 0.32
二本松 0.48	相馬 0.26
飯館 0.78	南相馬 0.35
会津若松 0.09	郡山 0.49
田村(常葉) 0.11	双葉(石熊) 9.66
南会津 0.06	白河 0.20
いわき 0.09	

注：1時間当たりのマイクロシーベルト

西武新宿線上井草駅、改札口に杵渕さんが待っていて下さいました。そこからおしゃべりしながら向かうこと5分、木立に囲まれたご自宅に到着。昭和29年、庭いじりや畑仕事がしたいというお父上が選択された地です。

お父上（旧中9回生）は千原出身、あの有名な嘉納治五郎（柔道家）の愛弟子。旧制村松中学校教諭時代、柔道の実力を見込まれて広島県江田島の海軍兵学校の教官になります。将来の海軍を担う幹部候補生に柔道のみならず水泳も教えていたスポーツ万能教官だったそうです。

昭和5年、宝町出身のお母上と結婚、昭和6年に杵渕さんが誕生します。江田島小、旧制広島県立呉第一中学校、その2年生の8月に終戦。海軍兵学校は閉鎖され、一家で村松へ戻り杵渕さんは旧制村松中学校の2年の2学期に転入します。村松はご両親の故郷、呉の旧中時代にも時折帰っていた所でした。

昭和25年、新制県立村松高校を卒業（2回生）し青山学院大学へ。更に、お父上は1年間島根大学の教授として単身赴任することになります。父（島根）、母・妹（村松）、そして杵渕さん（東京）、離れ離れの生活となりました。

昭和27年、東京水産大学教授になったお父上は一家の東京生活を決断。蓮池元秋田県知事所有の目白別宅での東京生活を開始、その後上井草へ移られます。ところで、東海大学の武道学科は柔道の世界では山下泰裕選手を始めとしてとても有名ですが、東海大学創設者松前重義氏からその創設の命を受けたのがお父上。水産大学定年後のことでした。杵渕さんは、間近でお父上の大変なご苦勞を知ることになります。

昭和30年、大手タイヤメーカーに就職。お母上も長岡女子師範卒で小学校の先生という環境でもあり、杵渕さんは教員免許（中高の英語、社会）も修得していました。しかし、『鉄は国家なり』の時代、堅実な選択でした。総務部・株式係で6年、役員の考え方を学びました。そして希望して平塚工場・工程係へ。計画実現のため、現場の先輩社員との煙草でのコミュニケーションが欠かせなかったと仰います。特にこの頃、工場では労働組合の活動が活発で御苦勞は大変だったそうです。3年後、新橋の本社・タイヤ生産本部へ。生産体制を作成し、工場へ指示する部門です。ここで人生の師となる上司と巡り会い、経営計画、利益計画、品質管理、生産体制、そして組合交渉など徹底的に学びます。奥様が仰います『主人は、字が上手いんですよ』、と。字までこの先輩から学びました。メンターに出会い、徹底的に教わった時代でした。そして、“飲みにケーション”。新橋を出るのは午前一時。タクシーで保谷まで先輩を送り届け、帰宅。寝

て、起きて、朝食、9時には新橋本社で仕事をしています。

さあ、ここから素晴らしい成果が実って行きます。まず、（1）5人の工場長との信頼関係を築きます。『WIN-WIN』の関係です。とても厳しい要求を出す一方、相手からの要求にも全力で応える姿勢を伝えます。当時の工場長との交流は今も継続しています。

（2）52歳で赤字工場の責任者に。『絶対に黒字にするから、皆さん協力を！』、と労組をまとめ2年後社長賞を獲得。

（3）54歳、1億円で買収した200人の新規事業会社の社長に。

（4）60歳理事。

（5）62歳定年、その1ヶ月後、先輩からIT関連企業の経営参加を打診され『一肌脱ぐ』ことを決意。しかし、会社には200万円しかありません。銀行に融資を依頼するも経営計画、資金繰り表提出が条件。資金繰り表など作成経験もなく1から勉強します。提出してみれば、銀行はその内容に仰天し1900万円余りの融資を決定。以降、銀行への決算報告を継続しながら、なんと1年目で2割配当を実現します（すご〜い）。

インタビューを終えて、『杵渕さんは、企業戦士ですね』とお伝えしたところ、奥様から空かさず同意の声。ご子息も同じイメージを持たれていたそうです。

『人生の目的は、社会貢献』『小さな積み重ねが連鎖して役に立つ』『なにくそ・コンチクショウ精神』『相手を知る、故に相手に知ってもらう』『着地点を作っておき、それから交渉に入る』『迷惑をかけない』『常に挑戦／逃げない』『もうちょっと良くなりたいか／成長したいという人間の基本的欲望』『人生は運命』、いわば杵渕語録。とても勉強になります。

そして、まだまだ挑戦の日々が続いています。70歳から仏語。奥様とのフランス旅行で一言もしゃべれなかったくやしきから。更にボイストレーニング。奥様の伴奏で家での復習もあるとか。応援して下さい奥様の存在が見逃せません。そして、月に一度はお二人で演奏会や美術館へ行かれるそうです。

杵渕さん、奥様、お元気で過ごしてください。

ありがとうございました。



【私の座右の銘】

「老驥伏櫪 志在千里」

東京同窓会元会長、現顧問

佐伯 益一（旧中27回）

表題の“老驥伏櫪 志在千里”は、“ろうきふくれき しざいせんり”と読む。

これは、日に千里を走る驥馬も、齢老いて床に伏しては居るが、志は常に千里の先を見ている、との意であり、古代中国、三国志で有名な戦略家、曹操の言葉で、私の座右の銘でもある。

市為の人の晩年に至るも、猶不遇であつても、其の死せんとする際も尚、遠大の志を棄てぬの意と大辞典に載っている。

書を乞われると、悪筆ではあるが決まって好んで書いている。

古くより人間、特に私達年代の者は、男女を問わず幼児期より成長してゆくに従い、将来は陸・海軍大将、学者、博士、芸術家、その他、後世に名の残る偉大な人間と成るべく、大きな夢を持ち、努力してきたものである。

私の父親が建設会社を経営していたので、私も将来はその道を進みたいと考えていた。

旧中学を卒業すると、土木科のある専門校へ進み、一応の資格も得た。

戦後、私の住む村で阿賀野川を横切る吊橋建設の話が持ち上がり、その設計を村から依頼され、私の社会に於ける初仕事となった。

苦労はしたが、何とか図面を納めることが出来、その後、村営の架橋建設が実施される事になり、若年の私が工事管理、即ち工事監督を委任された。

折から朝鮮戦争が始まり、業者は鋼材、セメント等の調達に大変、苦労をした。それが今の「鹿瀬橋」(注)である。

今に至るも無災害である事が嬉しい。

後年、東京に出て道路工事に従事して来ているが、未だに無事故で通している。土建屋として誇りに思っている。

((注)「鹿瀬橋」は、昭和25年1月に起工式を、同27年11月に竣工式を挙げている。)

最後になったが、母校の後輩諸兄姉に訴えたい。

“一つでもよいから大きな夢を持ち、その実現に努力することである”と。

ご健在を祈る。

高岡 光夫（高15回）

高齢者は、職縁から好縁へ、と書いたのは堺屋太一（高齢化大好機・NTT出版）である。

66歳で会社勤めを終え、地域への関心が芽生えた。身近な自治会活動や広報誌に関心を寄せていたところ、縁が出来たのが高齢者の介護予防を目的としたシルバーリハビリ体操であり、熟年男性講座の延長である「二十一友の会」という学習会である。

同じように自治体主催のピアノ講座から始まったのが、修了生でつくる「ジョイズピアノクラブ」である。ピアノ講師の「やってみなければわからない。」という言葉で続けてみると楽しさがわかってきた。

ピアノを始めて一年が過ぎたころ、コンサート開催の話がでてきた。コンサートは、20人の仲間のほか、ゲストも参加する大掛かりなものである。

曲決めは、コンサートの半年前である。思い切って「津軽海峡・冬景色」の弾き語りに挑戦することにした。ところが、練習をしていくうちに指が思うように動かず「選曲ミス？」と弱気になってしまった。

仲間がいるのは嬉しいもので、こんなときは情報交換をしたり、合同練習で励まし合ったりした。「何とかなりそう。」と思ったのは、コンサート前日であった。

コンサート当日、リハーサル時に演奏順がトップと知り、緊張感が一気に高まった。演奏中に、頭の中が真っ白になったら「最後の音はドで終えるのよ。」という先輩の励ましで、無事発表を終えることができた。

苦労すればするほど、弾き終えた後の喜びは大きい。それを更に大きくしてくれたのが、仲間からの花束プレゼントである。

コンサート終了後、友人からピアノの連弾の申し込みがきた。ピアノが私の世界を少し広げてくれた。

地域での私の活動は、自分のやってみたかったことを「ちょっとやってみる。」ことである。そのちょっとが楽しい。



コンサートを終え、贈られた花束を手に（2012・6・3）

第18回親睦ゴルフ大会報告

平成24年10月11日(木)恒例にしている松高東京同窓会の第18回親睦ゴルフコンペが、埼玉県の入間カントリー倶楽部に於いて開催されました。

4～5日前から雨模様の予報だったのが見事に外れ、当日は朝から気持ちの良い秋晴れに恵まれて、皆さんの日頃の行いがいかに清く正しいかを改めて思い知らされたのです。今回は、故郷から前日に乗り込み、元気に参加された間藤氏始め、今回初参加の漆原茂氏(高14回)を含め9名が勢揃いし、8時35分に3組でスタートをして行った。成績は下記の通りであるが、東京同窓会の中には腕自慢の会員が、まだまだ多く居られる筈である。多数の皆さんがご参加下さいますようお願いいたします。

懇親会の席上、楽しい談話と表彰式を終え、名残を惜しみつつ解散しました。

いつも亀山氏、吉井氏のご尽力には感謝申し上げます。

成績(敬称略)

優勝・片柳ムツ、準優勝・亀山知明、3位・石黒勝夫

参加者名(順不同・敬称略)

1組 片柳ムツ、吉井 清、大橋貞夫

2組 亀山知明、瀬倉武志、間藤謙一

3組 今井英雄、石黒勝夫、漆原 茂



第19回松高東京同窓会 親睦ゴルフ開催のお知らせ

平成25年4月10日(水)入間カントリー倶楽部に於いて第19回親睦ゴルフ会を開催致します。

参加ご希望の方は下記までご連絡ください。

吉井 清 (高8回) Tel&Fax : 042-527-6482

亀山 知明 (高3回) Tel : 042-572-5096

——個展のお知らせ——



尾瀬 F15

紫陽花 F50

第15回 小出博三氏(高8回)油絵展

■会期 '13/3月3日(日)～3月9日(土)

AM11:00～PM7:00 最終日はPM5:00まで

■会場 東京交通会館B1(シルバーサロンA)

千代田区有楽町2-10-1 Tel. 03-3215-3826

JR線 有楽町駅 京橋口 下車正面

地下鉄 有楽町線 有楽町駅 下車A8出口

●アトリエ● 〒274-0812 船橋市三咲7-22-20

Tel. 047-448-9632

～健康ウォーキング(散策会)のご案内～

次の通り健康ウォーキング(散策会)を行います。(現地集合・現地解散、雨天決行)どなたでも奮ってご参加ください。お待ちしております。

- 日 時 平成25年5月11日(土) 午前10時、JR中央線・京王線「高尾駅北口」集合
(駅前で村松高校東京同窓会の幟を立てています。それを目印にお集まりください)
- 行 程 高尾駅北口→(徒歩20分) 武蔵野凌墓地・多摩凌・多摩東凌見学と参拝(100分)→
(徒歩25分) 高尾駅南口ダイエーバス停前→(バス5分) 八王子健康ランドフロッピー
(入館料1,800円)(適宜、入浴・懇親会後、現地午後3時ごろ解散)
- 経 費 自己負担(交通費、飲み物代、食事代、入館料、入場料等)
- 問合先 石黒勝夫(高14回)(Tel: 03-3330-4564)
森田勝美(高16回)(Tel: 03-5681-0793)まで。

「育てられた」半生

三宅 紀子（高20回）

昭和24年10月、三川村五十島出身

人生を振り返ると、「故郷」に行き着く。自分にとって故郷とは、「人生の土台を為すもの」だからだ。

時に厳しく、そして優しく、包みこんでくれた故郷の自然と家族が私の背骨を育ててくれた。

村松高校時代、「看護師になる」との夢を抱き、故郷を離れることを決めた。まだ女性が職業を持つということに偏見があった時代だったが、「職業を持って自立したい」という思いがあった。

上京して東京女子医大看護短期大学に入学。看護系の短大としては11番目に設立された学校で、教授陣の看護にかける思いは強烈なものがあつた。

そこでは、プロとしての職業観を植えつけてもらった。命のやり取りをする現場では、少しの甘えも許されない。患者さんの気持ちに寄り添う「考える看護」から優しさだけではない「科学的看護の実践」まで、厳しく仕込まれた。実習では、質問に答えられないと臨床にも出してもらえなかった。

目の前にいる人は今、何を求めているのか、何をどうして欲しいと思っているのか。何度何度も自分自身に問いかける日々・・・。「看護魂」を徹底的に教え込まれたのだと思う。

看護師になって、今年で40年余が経った。自分でも不思議なくらい、夢中で仕事をしてきたと思う。

勤続17年目となった現在の職場は、埼玉県でも有数のリハビリ専門病院として、その役割を担っている。120人のセラピストと看護職90人を抱える大所帯であり、主に脳血管障害の入院患者を受け入れている。

後進を育てる立場となった今、思い悩むことも多い。3か月ほど前、「育てる」と決めて21歳の青年を採用した。それまで一般的な道から外れて生きてきたとも言える彼の言葉の端々には、小生意気さも感じる。その言動は周囲にとっては理解しがたいものであり、同僚たちは、奇異の目で見つめている。

しかし、つぶさに観察していると、未熟な人間性の中に、情の深さを感じる時がある。どのような環境で育ってきたのか、推し量るのにはまだ時間がかかりそうだが、介護福祉士として、地道な人生を歩ませてあげたいと思っている。

どのような環境に生まれようと、馬鹿な事をした思春期があつたとしても、地道に働こうとしている若者を理解してあげる努力を続けたい。人を理解する職業に携わる者として、患者であつても仲間であつても、その人間性を認め合っていくことは欠かせないと思うからだ。だからこそ、育成にあたる私自身がぶれないことが大切であり、平常心を保ち続ける事が現在の私に与えられた課

＜東武動物公園にて、娘と孫＞



題である。

若かつた頃、この青年と同じように思考錯誤しながら過ごしてきた。その半生を振り返ると、脳裏をかすめるのはやはり、生まれ育った故郷への思いである。

透き通った川で泳ぎ、魚獲りに明け暮れた夏。紅葉する山に入り、クリ拾いに夢中になった秋。吹雪の中、体を丸めて歩いた通学路・・・。カタクリの花が咲き乱れる畑の風景を待ち焦がれ、雪解けの土手に顔を現したフキノトウに歓声をあげたあの頃が懐かしい。食卓に並ぶ四季折々の食べ物のおいしかったことなど、思い出は尽きない。何といつても、黒い煙を上げて走る磐越西線の汽車に乗って学校へ通ったあの頃。

東京に出てからは、帰省すると、実家の食卓には、子供の頃と同じように、旬の食材が出てきた。今は亡き父は、自慢の盆栽を「持って行きなさい」と持たせてくれ、帰省を喜んでくれた。時に厳しく、そして優しく、包みこんでくれた故郷の自然と家族は、私の心に暖かさとし気をみなぎらせてくれている。

高校の同窓会には知らない人ばかりだが、自分をその輪の中に置くだけで故郷の感性が伝わってくる。

年齢を重ね、はつらつとして語り合っているみなさんの様子を見ていると和んでくるのは私だけではないだろう。毎年東京同窓会に参加し、無意識に四季の移り変わりやにおいを感じながら、年齢を重ねてきたそれぞれの生き方や生きざまに思いをはせている。

育てることと育てられる関係は、背中合わせの状態であり人生を重ねている。私も二人の娘を育て、その娘たちも巣立った今、親の立場でわかる事もたくさんある。

懐かしく感じる故郷で愛情を持って育てられてきたこと。愛情を繋いでいく家族がいること。子供たちには埼玉が故郷であること。故郷の自然と家族の絆が繋がっている事を娘たちも、子供を育てながら実感してほしいと思う。孫の成長を楽しみながら、もう少し泣きごとを言わず職場での役割を果たしていこう。そして先輩の皆さんのように元気に過ごしていきたいと思う。

《突然、お題を頂いて慌ててしまいましたが、半生を振り返らせて頂くきっかけとなったことを感謝します》

“千葉市美術館”へお出掛けになりませんか

石井 清和 (高20回)

私の3番目の、現役を退いてから2番目の職場となります。違和感を感じられる向きもあるかもしれませんが、私が極めて楽しく過ごしている職場でもあり、地方自治体が運営する公立美術館としては評価が高く、この記念誌が皆様に届くころには、新春を迎えるのに相応しい展覧会が開催されており、多くの方々にお知らせする意義もあろうかと考えました。

まず、最初に「千葉市美術館」について簡単にご説明しておきます。

この美術館は、荘厳なネオ・ルネサンス様式の建物(旧川崎銀行千葉支店を保存改修したもの)に、千葉市中央区役所が併設されており、保存・改修に際し、旧川崎銀行を一端、敷地内に移転し、地下3階、地上12階に耐えられる基礎を強固にした後に、元の場所に移築し、その上に覆いかぶさるように、美術館・区役所を増築したことにより、この建築様式は「鞘堂方式」といわれ、保存した「旧川崎銀行」の部分を「さや堂ホール」と呼んでいます。

このさや堂ホールは、その荘厳な雰囲気・特性が注目されたため、映画、TVあるいはCMフィルムのロケ現場、さらには、「コスプレ族」の撮影現場に利用されています。八千草薫さんの「皇潤」のCMフィルムは、ここで撮影され、TV番組では長澤まさみさん、片岡鶴太郎さんなど、名だたるタレントさん達が撮影にお見えになっています。

この美術館は、平成7年3月に開館しましたが、その創立のきっかけは、「浮世絵師 溪斎英泉」の研究者でありコレクターでもあった、故・今中宏氏(和菓子の老舗として有名な、大阪に本店のある「鶴屋八幡」に生まれ、旧制中学時代は、あの手塚治虫氏と同期)の英泉コレクションが、千葉市の所蔵品に収まっていたことでした。

こうしたことから、「浮世絵好き」などからは、決して避けて通れない美術館のひとつ、それが千葉市美術館であり、この分野の展覧会を企画したら、右にでる美術館はないとか、来館者を魅了してやまない、などと称賛の声が寄せられてもおります。

ちなみに「浮世絵」ということばの由来については、人生50年と言われ、人々の平均寿命が極めて短かった江戸時代には、どうせ短い人生であるのであれば、この世を憂世(憂鬱な世界)だと諦観し、そしてあきらめて暮らすのではなく、浮かれて楽しく人生を送りたいというポジティブな思いを込めて、錦絵(当時も浮世絵の別称)を憂世絵ではなく、浮世絵と称したのではないかともいわれています。

さて、ここまで述べてきましたが、千葉市美術館に行くと「浮世絵」しか鑑賞できないのか、との印象を読者

のみなさんに与えたかもしれません。決して、そうではありません。2010年には「田中一村 新たなる全貌」、2012年には「曾我蕭白と京の画家たち」などが展示され、北海道や関西方面の遠方から多数の方々が来館され、高く評価されていますし、西洋画ではシャガールやパウ・クレイなど、大々的に展覧会を行っています。

遠くから千葉市美術館にやってくる愛好家の方々は、『千葉市美術館へ、～展を観に行く』のではなく、『千葉市美術館の～展を、観に行く』のだとの指摘もなされております。千葉市美術館へ行けば、必ず何か新しい発見のできる、期待に合う展覧会をやっているはずだから行く、というのです。

以上、いささかというより、極めて前説が長くなりましたが、この記念誌が皆さんに届くころに開催されている展示会をご紹介します。筆を置きたいと思います。

それは、Kimono Beauty 展／キモノ・ビューティ展です。「きもの」はその素材・技法・模様とともに、日本独自の文化遺産として、非常に高いものとなってきています。江戸時代中期から昭和初期にいたるもの、日本女性美を支えた帯や髪飾り、当時の女性風俗を描いた絵画など「きもの」以外も展示されます。その中には、ボストン美術館の所蔵品の中から、明治初期に来日し、日本文化を心から愛した米国人医師・ビグローが収集したものも含まれます。世界に誇れる日本の着物文化に改めて光をあてたいものです。

皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

Kimono Beauty

——シタデでモダンな装いの美——江戸から昭和——



会場
千葉市美術館
千葉市中央区中央
3-10-8
Tel. 043-221-2311

会期
2013年
1月4日～2月11日

「田中荘」物語

酒と泪と男と女

堀 直昭 (高8回)

上京して間もなくの頃、渋谷区初台の水道道路沿い、一階と二階に三畳間が三室ずつの「田中荘」は文字通りのボロアパートだった。オレの部屋は二階の一番手前、真中が独身の肉体労働者、奥が夫婦者。廊下の脇に流し台とガスコンロの共同炊事場があった。

隣が「三国屋運送店」、次が大衆食堂で、その隣は洋服店でいつも三〜四人の女性たちがミシンを踏んでいた。五十年以上も昔のことだが、なぜか鮮明に覚えている。

三国屋には中学生くらいの美少女がいた。流しで顔を洗っていると、向かい合っている窓から美少女がオレを見つめている。「おはよう」と挨拶するとコクリと頷いて素早く姿を消す。オレに興味があったのかも。今はどんなお婆さんになっているんだろう……。

部屋は畳二枚と、窓際に一段高くなった物入れの上に畳が一枚、そこが万年床の我が寝所。荷物は鍋とフライパン一ヶ、数個の食器、小さな机の上に蓄音器とテープレコーダーだけ。レコードからテープに音を録り、繰り返し聴いて音譜を採取、直ちに膝を叩いて練習、ロイ・ヘインズやシェリーマンなど、大好きなドラマーたちのフレーズをパクっていた。

一階にはハーフの男の子二人を育てる女性が住んでいて、扉の三十センチ四方くらいの窓ガラスは割れたまま、真冬でも布団の無い部屋で三人が抱き合って寝ていた。父親は米兵？ 子供たちを捨て、アメリカに帰ってしまったのだろう。子供たちが「お兄ちゃん」と訪ねてくると、一緒にレコードなど聴いて遊んだ。お母さんがオレの衣類を洗濯してくれた。

新宿の小さなプロダクション、バンドは初代がミッキー・カーティスのクレイジーウエストだったと思う。ケイタイもインターネットも無い時代なのに、なぜかファンの女の子たちが訪ねてくる。誰にも住所は教えていないのに……？

部屋に入りきれないときは廊下にはみ出してしまふ。無口で硬派のオレは対応の仕方も分からず、部屋の片隅で酒を飲む。女子たちは勝手におしゃべり。一人で訪ねてくる女子もいたが、冬など暖房器具も無いので、布団の両端からもぐり込みお話をする。もちろんお話だけである。

「ホリちゃん、泊めて〜ッ」と言いながら、次々とバンド仲間たちもやってきた。新宿からは歩いて来れる距離だから便利だったのだろう。布団は一つしか無いので一緒に寝るが、あの頃はフツウのことで、今流行りのオネエなど居なかった。

後にブルージーンズのベース弾きになる有馬修、別府からは間島夫妻が長期間住みついてたこともある。大勢の芸者たちが足袋が汚れるからと、土足で上がってき

たこともある。それほど汚いアパートだった。仕事に出掛けようとしていたら薄汚れた少女たちが三人訪ねてきた。留守のあいだ寝かせて欲しい、と言われ承諾。夜中に帰宅すると未だ眠っていた。新宿駅東口の芝生の生えた植え込みみたいな場所に若者たちが棲み着いて、〇〇族と言われていた時代だが、その一派。「久しぶりにゆっくり眠ることが出来ました」と礼を言い、少女たちは帰っていった。

新宿のキャバレーの仕事が終わり、楽屋口を出るとローズマリーが待っていた。その日のショーで踊っていたストリッパーである。スラリとした色白の美人、その日初めて逢ったのだが、オレに一目惚れしたのだろう。「焼肉を御馳走するワ」と言われたが、肉に飢えていたオレに断る理由はない。久しぶりの焼肉を喰ったあと、「ホリちゃんのアパート見せて」というから一緒にタクシーで帰宅。「自分の部屋はちゃんとあるんだけど、時々泊めてくれる？」と聞くから何となく承諾。

彼女が仕事で出掛けたあと、毎朝、机の上に三百円が置いてあった。ラーメンが五十円で喰える時代だったから大金である。時々どころか、それから毎晩彼女は訪ねて来た。半年が経ったころ、「ストリッパーは辞めることにしたの。母が札幌でバーを経営してるからそこで働くの。一緒に行きませんか？」と誘われた。別れがたい気持ちもあり、女性からのプロポーズをむげに断ることも出来ないが、ドラマーになりたくて上京してきたオレに札幌のバーテンダーになる気持ちはない。どうしたら良いか分からん。曖昧に意味不明の言葉を吐き、寝たふりをする。

沢田ケンジの「勝手にしやがれ」の歌詞、

壁際に寝返り打って 背中であかしている やっぱり
お前は出ていくんだな —— 寝たふりしてる間に、
出ていってくれ ——

数年前に初めてこの歌を聴いたとき「ッ？ オレのこと？」と、あの日の田中荘を思い出した。

彼女はわずかな荷物をボストンバッグに入れたり出したり、何時間もグズグズしている。やがて小さなため息とドアの閉まる音。外でタクシーを呼び止める声、車が走り出す音……。

あの女は今、どうしているんだろう……？

今年、六月二十八日、小野ヤスシが死んだ。音楽の世界からは十数年で姿を消したオレのことなど覚えているはずもないが、「ホリちゃん、今晚泊めて〜ッ」と言いながら現れていた小野ヤスシの声を、オレは今でもハッキリ覚えている。

人生には諸行無常の美学がある、ような気がする。

五十年振りの再会

鶴巻 豊 (高16回)

参集された学友達は、様に柔和な表情を漂わせていた。しかし、その表情の裏側には、一言で語り尽せないそれぞれの「人生の戦い」があったに違いない。

五十年という歳月は、それぞれ悲喜交々の事があり、それらを一つ一つ乗り越えられたからこそ、「今日という表情」が生まれ、私達に見せてくれたのだと思う。

彼等が、それぞれ当時の思い出を語る時、遠くを見据え目を細め、過去の一瞬一瞬を確かめつつ語る、そんな印象を抱いた。

五十年という長い間、丁度酒が、樽の中でじっくり醸造され、研ぎ澄まされ、雑味が消えた切れ味の良いものに似た表情に思えた。

私の高校当時の思い出の一つは、世界史（高三時選択科目）の授業だ。教師の容貌の様子は、頭髪は常に櫛目がしっかりと入っていた。ネクタイは、洒落た花柄やカラフルなもの、それも毎日その柄が変わっていた。又、当時男性はあまりつけなかったオーデコロンの香りがしていた。「活かした初老教師」で魅力溢れる人だった。

彼の授業スタイルは、「世界通史」をさらっと流し、後の授業は、「フランス革命」一辺倒だ。十八世紀後半、ブルボン王朝王政下にあった「市民」が、「蜂起」し、人権を軸とする「共和制国家」を確立する内容の授業だった。

教師の思いと、授業内容に共鳴した受講生の有志が集まり「松高でパリ祭をやろう」と話し合った。

受講生達は、教員会へ要望書を提出し、何度か交渉の末、生徒主催の行事「パリ祭」が開催出来た。

此の経験が其の後の「教員活動」に生かされたと思っている。



昭和39年度卒業村松高校第3回東京同期会 2012年5月20日 於:新宿

昭和39年度卒業村松高校第3回東京同期会
(2012. 5. 20 於: 東京・新宿)

大きな道草

澤田 悦子 (旧坂田) (高16回)

小さな頃は、よく道草をしたものです。学校帰りに頬ばった、熟れた桑の実の美味しかった事……。雨上がりの水溜りで時間も忘れ、きれいな石を探したり……。

古民家を買わないかという話が舞い込み、現地を訪れたのは16年前でした。新潟県魚沼地方。信濃川に注ぎ込む清津川・清津溪谷の麓にありました。

大変な豪雪地帯ということで、どっしりした平屋の建物でした。切り妻造りの屋根は、茅葺きからスレート屋根に葺き替えられ、外形的には思い描いたいわゆる古民家の様相は呈していませんでした。

古民家の魅力は、何と言っても柱や桁、梁の何百年も生き続ける木の魅力です。地元の裏山の木々を切り倒し、斜面をうまく利用して組み立てていった風土に合った工法も虜にさせるものがあります。

この家の内部は、まだ住まわれていたので荒れ果てた様子もなく、黒く煤けた壁は生活感があり、太い柱や桁には漆の美しい飴色が残っていました。

天井は意外に低く屋根裏部屋が様々に使われていた事を思わされました。しかし、屋根裏を覗きこみ息を呑みました。組み合わせられた木々の太さや姿に魅了されてしまったのです。豪雪に耐え100年余も人々の命を守り、繰り広げられてきた生活を包み込み、支えてきた木材の温もりと強靱さに心が震えました。この家での役割を果たしたのであれば、愛でて楽しませてもらおう……そんな思いが沸き起こり、即決し、同じ新潟の地、私の故郷・川東、子供時代の道草の地に移築しました。

退職して7年になろうとしています。「古民家館みちくさ」として、夫の絵を常設展示し、様々な催し物に使い多くの方々に愛でいただいています。私にとって古民家館は、大きな人生の道草。夢は、子供たち・若者の絵画展……。16年前覚えた、息呑む感動をどうしても伝えたいのです。



表紙説明 東京駅丸の内駅舎は1914年、建築家辰野金吾設計により創建された。23年に発生したマグニチュード7.9の関東大震災にも耐えたが、45年の空襲（太平洋戦争）でドームや3階部分が焼失。戦後、損傷の激しい3階部分を撤去し、47年に2階建て八角屋根の駅舎に改修された。54年、八重洲口新駅舎が僅か2年で完成し、近代的ビルの大衆駅となった。2003年、丸の内駅舎が国の重要文化財に指定され、2007年、丸の内駅舎保存復原工事が始まる。この工事では、外観を創建時の姿に忠実に再現するのは無論のこと、鉄骨煉瓦造りの下に地下躯体を新設し、巨大地震にも耐えうる「免震工法」が施工され、2012年10月1日、工事完了によりグランドオープンした。1915年開業の東京ステーションホテルは10月3日、6年振りに営業を再開し客室数も58室から150室に増えた。因みに総工費500億円は空中権を売却して捻出されたそうである。創業時、1日の利用者は9,500人ほどだったというが、現在は約38万人が乗降する。14本のプラットホームを有し、1日当たり約4,000本（JRのみ）の列車が発着する日本一の巨大ターミナルである。大橋貞夫（高10回）

募集中！ 原稿・情報をお寄せください。

日頃考えていること、取り組んでいることなどをはじめ、同級会や地域で活動していることなどをお気軽にお寄せ下さい。また、是非、ご紹介して欲しい「先輩」や、あの人にお聞きしたい「座右の銘」、訪れたい「散策場所」などの情報提供もお待ちしております。

寄稿に当たっての留意事項

- ▶ 文字数： 800～2,000字程度（出来れば写真を添えて）
- ▶ 締切り： 平成25年9月30日（月）（必着）
- ▶ 連絡先： 広報委員会 石黒勝夫まで
〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北6-32-19
TEL&FAX (03) 3330-4564
E-mail : isgrkto-214@mail.goo.ne.jp

編集後記（広報委員の皆さんです）

- ▼新企画「先輩！こんにちは」がスタートしました。多くの方に継続して、みんな、特に現役松高生に興味関心を持って欲しいと願っています。（高22回 滝沢 義則）
- ▼本年は「迷惑をお掛けしました」が、新年からは頑張ります。よろしく願います。（高14回 木村 寿一）
- ▼『伝える手段』のひとつとしてのパイプが機関紙であるのか、『気持ち』を伝える、を大切にお手伝いをしていきたい、と思います。（高15回 高岡 光夫）
- ▼広報委員として、会報に掲載する原稿を書いてくださる方を求めています。旅行記等内容は自由です。皆様の協力をお待ちしています。（高16回 森田 勝美）
- ▼まだ殆ど勝手の分からない新前です。人手の要る作業等から徐々に慣れていけたらと考えています。母校卒業後、故郷を離れた若い人々に声が届きますように。（高19回 塚野 ミイ子）
- ▼この度、四十六年振りの同級生に誘われ、不安と好奇心を感じながら参加。総会が五十五回目ということや、また盛大に開催されていたことを初めて知り、びっくりしています。（高19回 野平 茂子）
- ▼同窓の友にふるさとの情報を発信し、同窓生のパイプをつなぐ価値ある会報作りに、今後とも微力ながらお手伝いさせて頂きたいと思えます。（高20回 安中 信大）
- ▼編集会議に欠席しがちで、不明を恥じています。今後は新規会員の増加につながる情報の収集に努めることにより、職責を果たしていきたいと思っております。（高20回 石井 清和）
- ▼上京して早や四十数年……。決して順風満帆な生活だったとはいかないまでも、今こうして元気で、同窓の皆様と交流できますことに感謝！母校の後輩たちの活躍ぶりを期待しつつ、広報編集に携わっていききたいと思えます。（高22回 阿部モヨ子）

平成25年1月 第54号

表紙の題名・題字は佐伯益一氏（旧中27回）の書

発行人 新潟県立村松高等学校東京同窓会 広報委員会

新潟県立村松高等学校 東京同窓会事務局

〒190-0011 東京都立川市高松町2-37-18

Tel・Fax 042-527-6482（吉井 清）